

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	イメージ世界の存在を確認する : 見えないものが見えるという体感を語ることを通して
Author(s)	宮田, 雅智
Citation	児童の言語生態研究 , 18 : 88 - 96
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046613">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046613</a>
Right	
Relation	



# イメージ世界の実在を確認する

——見えないものが見えるという体感を語ることを通して——

教材

「まほうづかい」（島崎藤村作）

宮田雅智

## 1. 今回の授業の前提

上原先生の言葉です。

「本当にいい子は『イメージ』も『思考』もいい。」

平成2年4月例会

「夢と現実との区別と言っても、しよせん人間は区別できないよ。区別しないで生きていた時の方がむしろ真実に近いと思うな。そこに自分がいるんだよ。」平成元年4月例会

今回の授業の領域は「構え」であり、「日々の生き様」や「人生」に直接関わってくる内容です。

その「構え」と「イメージ・思考」の領域がどのように関わってくるのが今回「夢と現実」を本格的に切り離そうとする傾向の強まる5年生に対してのこの授業を行うポイントや意義となります。

## 2. 教材文のあらすじ

まほうづかいがいろいろなおもしろいことをしてみせるのですが、こどもたちはちっとも珍しがりません。

そこで美しい虹を出して見せました。出した時には喜んだ子どもたちでしたが、すぐに「雨のあがった空へ日の光を受ければ、にじの出るのはあたりまえだ」とぶつぶつ言いだしました。

まほうづかいは一色ずつ虹の色を消していききました。最後には虹とともにまほうづかひも消えてしまいました。

子どもたちはもう一度まほうづかひをよび出してめずらしいものを見せてもらいたいと思いましたがどこにもいません。

ただ、忘れられないほど美しかったにじの色だけが、子どもたちの目にのこりました。

## 3. 指導案 抜粋

(1) 日時 平成25年8月14日(木)

午前9時00分～10時30分

(2) 児童

静岡県伊豆市立天城小学校  
第5学年 亀山貴洋子学級

男子11名 女子10名 計21名

(5) テーマ設定の理由

児童観

天城小学校は、狩野小、月ヶ瀬小、湯ヶ島小の3校の統合により、それまで異なる環境で生活してきた子どもたちが、新たな学校で知らない子どもたちと共に生活している。そのため、5年亀山学級は、3つの学校の子どもたちが混在する形で新年度を迎えた。気心の知れた数名の友だちと、初めて会う半分以上の友だちとの学校生活は、お互いに適当な距離を置きながら、大きな争いごともなく平穏

な形で始まり、1学期を通して大きな変化もなかったという。しかし、一見平穏に見える子どもたちの人間関係は、裏を返せば、本音をぶつけ合うこともせず、形だけの表面的な関係だけが続けてきた結果であつたとも言える。

子どもは、(学校) 社会の中で、さまざまな経験を通し、時には問題を抱え、ぶつかった壁を乗り越えながら成長していくものである。そして、それは、つまらない知恵で上手に現実対応をして平穏に過ごすだけでは実現することは難しく、時には本音をぶつけ合い、自分の心の内をさらけ出し、お互いの思いや考え方をぶつけ合ったり、認め合ったりしながら育んでいくものである。

5年生は、自分が持っているイメージ世界(生得的感性)を母体としながらも、社会的、現実的な問題を敏感に感じ取る時期である。しかし、イメージ世界に素直になりたいという思いと、現実的に対応しなければならぬというジレンマに悩む。

今回の授業の目的を「見えないものが見えるという体感を語るができる」とした。見えるものだけが見える(見えるものだけが存在する)という考え方は、表面的にしか物事を認識しないせまい見方であり、人間本来の姿を一面的にしか見ていない。当たりさわりなく表面的に人間関係を取り繕い、無味乾燥に生きていけばよいという考え方にもつな

がるのではないだろうか。

知識優先、社会性優先の現実対応を強いられてきた子どもたちに、生まれながらに持っているイメージ世界を意識させ、それをお互いに語らせることは、思いもよらない自分の姿や、新しい友だちの姿の発見につながる。

「見えないものも見ることが出来る」「こんなふうにも考えることもできる」「こんなふうにも思ってもよい」と素直に自分のイメージ世界を語ることで、イメージ世界の実在を確認させたい。それが、これからの子どもたちの生きる力を豊かにすると考えるからである。

#### 教材観・指導観

私たちの心は、ものに触れて動く。最初にあるのは関係である。私どもは、これまで「穴」「夕日」「つぼ」「人形」「橋」など特定のものに触れて鳴動する子どもたちの心の成長の実態を(授業研究、作文分析などで)報告してきた。それは、イメージの世界、言い換えれば潜在意識世界こそが子どもたちの生命力であり、右にあげたものとの関係の中で、その生命力は発動していることの発見であった。

私どもの主宰上原輝男は、かつて潜在意識世界を分母とし、現実世界を分子とする低学年の子どもたちの世界認識に、中学年に至って分母と分子の入れ替えが生じているとの指

摘をした。世界認識の大きな転換である。この大転換以降、高学年になってからも、潜在意識世界との関係を切らない生活こそが子どもたちの成長を保障するものと考えている。さらに、この潜在意識世界は、子どもたち個々の個別の世界ではない遠い先祖の胸の内、血の中に流れてきた伝承された世界でもある。

「見えていても見えていない」「聞いていても聞かえていない」ということが大人にも子どもにもある。言ってみれば、私たちは、見えていない世界を見ようとし、聞かえていない世界の音を聞きつけようとしている。右の事実がはっきりと自覚されるのは、最愛の人を喪失したあとである。花は散るからこそ花であり、虹は消えるからこそ、その美しさを、私たちは愛でる。そこに、その実在を認めている。

虹は、見える世界と見えない世界、二つの世界の架け橋と考えられている。「まほうづかい」に登場する子どもは、目に見えるものに絶対的な基準を置く生き方に固まり始めている。それでも、まほうづかいが虹の色を一つ一つ消していく、最後に魔法づかいも消えることを目の当たりにして、本来それぞれの子が生まれながらにして持っていたはずのイメージ世界を確認したところで物語が終わる。この度の授業では、意識世界の転換が終

わっていると考えられている5年生の子どもたちに消えて初めて分かるという実感、見えないものが見えるという体感を手掛かりに、イメージ世界の存在を確認したい。そのことよって、「現実的な思考や対応が求められる場合」と「自由にイメージの世界と交流している場合」を自由自在に使い分けられるような構えが取れるようになっていくという期待がある。

#### (7) 本時の目標

見えないものが見える体験を語ることを通して、イメージ世界の存在を確認することができる。

#### 4. 授業記録抜粋 及び 考察

紙面の関係でポイントとなる児童の発言・やりとりのみの抜粋です。

\* 教師は実名を漢字で表記し児童は仮名を平仮名で表記しています。

\* 教材名との関連で「まほうづかい」「魔法使い」両方の表記が混在しています。

\* 「↓」のあとに書かれているのは、そこまでのやりとりに関する補足や考察です。

#### 〈展開1〉

本時の学習の導入

亀山 クイズをします。

見えないけど見えるもの、聞こえないけど聞こえるものは何でしょう。

#### 〈展開2〉

まほうづかい(前半)の朗読を聞き心に残ったことを発表する。

ゆう えっと、心に残ったことは、まほうづかいが色を言うだけでその、空にある虹の色が消えるのが凄いなと思った。

小林 おー。魔法使いが、色を言うだけで、空に出た虹が消えていくところ。凄いな。

ゆう 普通だったら……

小林 普通だったら？ 普通だったら？

ゆう 普通だったら、魔法でやっとなんか消えたってなる場面なんだけど、未来的なこと、黄って言ったらすぐ消えるから。

小林 あ、未来的なこと。ただ、黄って言っただけで消える、そこが心に残った。

おー。ゆうさん的には、それってまほうづかいのパワーっていうか、そっちだっけ？ 思った？ 虹の変化とどっち？

ゆう んー。(言われたことがよく分からない様子)

小林 虹が消えたことか、魔法使いのパワーか。

ゆう でも、虹は数時間が経たないと、普通、時間が経たないと消えないから、多分魔法だと思う。

小林 はー。魔法について。魔法について心に残った人いる？

(挙手なし)

↓この「ゆう君」は今回の授業で最も繰り返し発言をした児童なのですが、「イメージ世界」と「現実世界」の間を大きく揺れ動きます。

\* \* \*  
けん 魔法使いがいること自体が(心に残った)。

\* \* \*  
まさ ぼくもこの世の中に魔法使いがいるとは思えない。

\* \* \*  
(他の児童とのやりとりの途中で、ゆう君から質問が出る。)

ゆう 質問がある。さっきも言ったんだけど「虹を消す」なのが、多分消える時間帯が分かっただけ。

小林 あ、魔法使いがね。

ゆう ただ魔法の、あの、格好をしてるだけで、時間を計ってたから、あ、次はこれが消えるなど思ってた色を言ったら、それが偶然当たった。

小林 あ、そのタイミングをちゃんと分かってて。ということは、トリックがあるということ？じゃあ、魔法使いじゃないっていうことを思ってたんだ。科学者とそう思った。ゆう 科学者、じゃない。

中川 でもさつきは、少し消えるのに時間が経つのにすぐ消したというのは魔法使いだと思ってる僕は思ってたって、さつきいつたけど。

ゆう 思ってたけど。

中川 ちょっと今考えてみたら、ちょっと時間をちゃんと計ってやったんじゃないかな、って。ちょっとそんな気になってきちゃったんだ。

小林 じゃあ、魔法使い……、さつき凄いと云ったの。魔法使いの振りは、してるけど、魔法使いに見せかけてるけど、本性は、なに？

ゆう 本性は、ただ子どもたちに面白いものを見せたいだけ。

小林 ただ子どもたちに面白いものを見せただけ。

ゆう 魔法使いがいる自体が不思議って言っ

たのが……

小林 けん君のあれが、あれで、触発されたの？

ゆう それを聞いて。

小林 そっか。だから、魔法使いじゃないと思う。インチキ？インチキって訳ではない？

ゆう インチキ、の前。

小林 インチキの前？ 微妙。

↓教室全体としては指名されてもなかなか発言ができない雰囲気が続きました。それがやはり5年生の段階としての壁であると思われます。

\* \* \*

まや えつとねー、雨のあがった時にしか虹ができないのに、晴れてる時に虹ができたのに、子どもが喜ばないのって、なんかやな子ども。(一同笑う)

小林 なるほど。そうだよ。そうだよ。ね。まほうづかい、凄いとやってるのに。ね。ねえ、晴れた時に出してるのに。

ゆう 確かに。

小林 それなのにそれを見た子どもたちはどんな感じだったの？

ゆずん？ なんかねー、つままない。

小林 つまないとかって。

ゆず 普通のことだからって。

小林 普通のことみたい。なるほど。初めてだね。そういう子どもの態度のことを心に残ったっていうのは。

\* \* \*

とも ほんとの魔法使いじゃなくて、ただのコスプレ。

\* \* \*

みほ 魔法使いが子どもたちを楽しませるためにやったのに、子どもたちがあんまり喜んでくれなかったの、魔法使いが可哀想だと思った。

\* \* \*

てつ 自分で空に虹が描けるのはおかしと思う。

小林 ああ、じゃあ、魔法使いはおかしいっていうこと？

てつ おかしい！

\* \* \*

りこ 虹が出て、子どもが一瞬喜んだところ。

亀山 ねえ、りこさんさあ。りこさんがもしそこにいた子どもだったら喜ぶと思う？

ゆう 僕は喜ぶと思う。魔法だと思ったらただだよ。

小林 ゆうさんは喜んだと思う。

\* \* \*

てる えっと、魔法使いが、空に虹を描いて  
それで魔法使いが消したのが凄いなと思いま  
した。

小林 描いて、そして自分でまた消したとこ  
ろが凄い。で、ひかるさんは魔法使いだっ  
て思った？

てる (首を傾げる)

小林 そこは微妙なんだね、やっぱりね。凄  
いけど、魔法使いかどうかは、はてなって  
いう人が、ねえ、何人かいるよねえ。は  
い、じゃあ、うん。

あお 虹が出る前は子どもたちは喜んでな  
かったけど、虹が出て、少しの間でも魔法  
使いは子どもたちを喜ばせることができた  
から、魔法使いは凄いなと思います。

### 〈展開3〉

まほうづかい(後半)の朗読を聞き「虹  
だけが子どもの目に残りました」を考え  
発表する。

ゆう 魔法使いは、虹のような珍しいものを  
見せてるのに、子どもたちがあんまり喜ば  
ないもんだから、虹と一緒に、『もう見せ  
てやらないぞ』っていうような気持ちでい

たんだと思う。

魔法使いが消えたのは、下に台かなんかが  
あって、それに隠れてるのかもしれない。  
↓まほうづかいの気持ちを考えつつも、やは  
り「魔法」を否定したいという気持ちは捨  
てきれずにいるようです。

(他の児童の発言をさき)

ゆう 最後の文の時に、子どもたちは魔法使  
いが消えて、子どもたちには、虹の色、目  
に虹の色が残るだけでした、  
だから、子どもたちの中では残ってるんだ  
けど…。

### 〈展開4〉

ワークシート記入「なぜ見えなくなっ  
てしまった虹だけが、子どもらの目に残っ  
たのでしょうか」

ゆう とても美しくして少しの間だけでも綺麗  
だと思っていたからだと思う。そして、魔  
法使いの方は、多分人間界ではなく、魔法  
使いの世界に帰ったと思う。  
……多分人間界ではなく、魔法使いの世界  
に帰ったと思う。

\* \* \*

ちよ 魔法使いに出してもらった虹だし、魔

法使いに出してもらった虹は見たこともな  
いし、信じられないから忘れない、忘れら  
れないほど美しかったのだと思った。珍し  
い経験をしたからしつかりと子ども目の目  
残ったのだと思った。

\* \* \*

あお 魔法使いが喜ばせようとして出した虹  
だから心に残った。消えた魔法使いの最後  
に見た魔法だから、子どもたちの心に残っ  
た、心や目に残ったのだと思います。

\* \* \*

亀山 たかさん、どう思う？いつでも、どこ  
でも、魔法使いが出した虹は子どもたちは  
もう見える？

たか 見えない。

亀山 見えない。じゃあ、いつ見えるの？

たか ……見えない。

(と言いつつ他の児童の発言を聞いて)

たか いつでもどこでも見える。

亀山 どっちだよ！

たか 心の中で。

亀山 心の中で、いつでもどこでも見えるん  
だ。

中川 ほら、ここ言ってくれてるよ。

小林 新しい展開。

(この流れでしばらくやりとりが続いたあと、「写真を撮ったから」という発言)

亀山 写真?カメラで?

まや 目だ!目ん玉だ!

瀬底 目でパシャッと写真撮って、その映像はどこにあるの?

たか 脳みそ。

ゆう でも人間は機械じゃないから…。

亀山 脳みそとか心って言ったのね。そういう経験ってない?本当は見えないんだけどいつでも見えるものを私は持っています。……いつでも聞こえるものを持っています。

……。

(複数の児童のやりとり後)

ゆう 相手の気持ちや、相手のしたいこと、それに、相手の心を想像すれば聞こえると、思います。

↓「魔法」というような非現実のことに對して最初は完全否定に近いスタンスだったゆう君だったが、授業の途中で大きく揺れ動き、最終的には「自分以外の立場」という観点もふまえての肯定的なスタンスになっています。

### 〈展開5〉

自分の日常生活の中で「見えないけれど

見える・聞こえないけれど聞こえる」という体験について発表する。

↓本時の目標にもあるように、児童態の授業の最終的な狙いは「物語の読解」を刺激剤として「日常生活意識」に何らかの変革をもたらすことにあります。

意識の転換によって同じ現実の中で生活していても「意識世界」≠「個々人にとつての現実」が違ってくる可能性が広がるのです。

ゆう なんか下田のおばあちゃんに会いたくなつたときに。

小林 そうするとお話もできるの? 会えてる?

ゆう いや、それはできない。

小林 でも見えてるの?(ゆう君、頷く) 見えるのね。そこにおばあちゃんいないんだけど、見えるのね。おー、虹と同じだね。

\* \* \*

ちよ 去年急に倒れて運ばれて、たまに会いに病院に行きたくなつたときに…。

小林 今まだ病院にいらつしやるんだ。うん。だから、見えない、会えないけど、でも、思うと会える。そこでは会える。でもそれはおじいちゃんもちよさんのことをそ

う思ってるかも。ね。ちよさんは、いなくても、きつと思ってる。

\* \* \*

てつ 『初めてヒットを打ったときの打球』で、レフトの前ところにワンバンで打って、良いライナーだったので、凄いい嬉しかった。

小林 それいつのこと?

てつ 2年生のとき。

小林 そんなに前のことでも、でも、見えないけど見えるんだ。

亀山 なんで見えないけど見えるの?

てつ え? 覚えてるから。

亀山 覚えてるから? なんで覚えてるの? てつ 嬉しかったから。

\* \* \*

小林 ふーん、でもね、見えないけど見えるものって、今日勉強したのは、魔法使いが描いてくれたものだったでしょ? でも、二人のって、魔法使いが描いてくれたものじゃないよね。二人とも、自分がやったことだよ。うん。だから、自分が思う。っていうことにも、見えないけど見えるものってあるんだね。

## 〈本時のまとめ〉

中川相手の心の感情を想像すれば、いつでも見えたり聞こえたりするんだよ。……忘れちゃうくらい（昔のこと）だけど感覚は残っているんだね。

小林2年生のときの、その体感を、やったーっていう、やったーっていうのを忘れられないんでしょ？で、繰り返し繰り返し蘇ってくるって、それ、時間超えてるよねあれ？ここで行っちゃったかな？その次元を超えるには、特別の装置がなきゃ、機械がなきゃいけないって、ちよつと言ったけど、でも、そういうの使ってる？タイムマシンとか持ってるの？持っていないよね。持ってなくても、もう時間超えられちゃってるって、凄いいよね。

もう忘れちゃうくらいだけど感覚は残ってるんだね。

亀山 だからみんなさ、見えてるものだけを信じてちゃ駄目ってことだよ。ね。だからさ、今、中川先生はここに見えてるけど、バーンなんて突っかかって、先生もよくそういうことあるけど、見えてるけど見えないものもあるし、見えないけど、見えるものが、世の中にはいっぱい、自分の中には、いっぱいあるってことだよ。だから、それを信じましょう。

ら、それを信じましょう。

↓「体感」「感覚」「感情」が伴っていればいるほど、それは単に過去の出来事の思い出ではありません。「リアル感を伴った現実」としていつでも甦ってくることは、人間であるならば何度も経験しているはずのことです。

そうした自分にも起きていることと、こうした非現実な存在が登場する物語とはつながりがあるということを再確認することが、現実意識を分母に転換したあとの5年生という段階にとって大切なことだと考えています。

## 〈おまけの問いかけ〉

宮田 ちよつとみんなの意見聞きたいんだけど、見えない世界は、自分とは全然かけ離れたところにある、と思う人。

### （挙手なし）

かけ離れたところがない、と思う人。

### （ほぼ全員挙手）

もう一つ質問。選択肢を二つに一つって強制して悪いけど「自分はこっちな」って思う方どっちかに手挙げて。迷ってるときには、どっちに手挙げてもいいよ。

じゃあ、「見えない世界の中にこの見える

世界があるんだ」と思う人。手挙げて。

### （数人挙手）

ああ、結構いるね。

はい、じゃあ、「見える世界の中に見える世界はあるんじゃないか」と思う人。

### （数人挙手）

はいはい。念の為、どっちにも手挙げた人、手挙げてくれる？

### （なし）

\*授業後、ゆう君に改めて聞くと

ゆう（ちよつと考えて）どっちもだよな

……

（授業時間…1時間27分）

## 5. まとめ

非現実の世界を素直に受け入れることに対して「現実的に物事をとらえられるようになった」という自負心が抵抗する、という5年生の段階らしい構えがゆう君に端的に表れていました。いつまでも夢の世界に留まっているのは幼い未熟な人間なんだという立場です。

だから例えば「サンタクロースなんて信じてるなんて馬鹿じゃん。あれはお父さんやお母さんなんだよ。」というような現実的なことを年下に向かって盛んに言い始めます。



でも心のどこかにはやはり非現実の世界をこれまでのように受け入れたいと思っ  
ているのもまた事実なのでしょう。だからこそ余計に自分にも言い聞かせるように、ことさらに現実的な見方を口にしまくりムキになって非現実な世界を否定します。

今回の授業のゆう君などは、完全にそうした非現実否定派にはなりきっていません。だから何とかして「まほうづかいの使った魔法」ということに合理的な説明が出来ないものだろうか」と「下に隠れたんだ」とか「タイミングを見計らってやったんだろ」と「等々の知恵をしばっていたんだと思いま

す。 兎言態でよく使う言葉の中に「イメージの裁断と継続」というのがあるのですが、現実意識に一旦目覚めた子が、再び夢の世界に立ち返ることも、それにあたりません。重要なのは、断ち切られて止まってしまったイメージ（運動）が再び再起動したというのは、単にまた元の状態に戻ったというのではないということです。無自覚に自由奔放にイメージの世界を広げられたというのではない、新たな境地での展開です。それは例えばピカソが幼児が自由にお絵かきをしていたのとは違って正確にデッサンする技能を磨き上げた上で非写実的な絵画を描く、ということにも通じていると思います。

ゆう君は、ある時点から、そんな現実的にばかり考えようとするガードは外していいんだなというふうになりました。それでもやはり「単に非現実を信じていた頃に戻るとい

るのではないんだ」と必死に自分に言い聞かせることは忘れていないように、私には見えませんでした。

最終的にゆう君は「魔法の国」の存在を肯定するような立場でワークシートに記入しました。

もし今回の授業が単に「非現実の世界をこれまで通り信じていいんだよ」とこちらが話してあげるだけでイメージ世界の復活を要求するだけだったら、知的な世界に目覚め、夢と現実の分母・分子が明確に逆転している児童ほど心の中では「でもそんなのはあり得ない」と思い続けたことでしょう。それでは仮に表面的には教師に迎合するような発言をしてくれたとしても、本音の意識世界とは切り離されての発言ですから、実際の生き様には反映させてはくれないと思います。

ゆう君が何度も自分から挙手して行った現実的な発言を、途中揺れ動いたら揺れ動いているままに存分に出してもらい、それらを教師側で丁寧に関心届ける、またそうしたやりとりを聞きながら他の児童も新たな触発を受ける……その積み重ねを突き抜けた先での「見えない・聞こえない世界」への後半の児

童たちの発言だったと思います。

私が「おまけの問いかけ」を試みたのは、「目に見える世界」と「見えない世界」が共にあるという雰囲気には教室全体がなっていたものの、同じ「どちらもある」といっても、両者がどのような関係にあるのかも確かめてみたいという意図からの問いかけでした。

見えない世界というものが「身近なところにある」ということに多くの児童が挙手したのは、もしかすると先験的イメージの世界に素直に立ち返れるようになった表れかもしれません。

2番目の質問は大袈裟に言えば「世界の構造をどう認識しているのか」ということです。

「見えない世界の中に見える世界」というのは唯心論……日本古来からの発想にあたります。「現世」を「うつし世」とし、言葉を「ことのは」としてとらえている感覚です。仏教では唯識論という言い方もあるそうです。

「見える世界の中に見える世界」というのは「唯物論」、あるいは解剖学者の養老孟子氏などがとなえている「唯脳論」に通じる立場です。

別にどちらかに決める必要はないと考えます。「こういうことはこっちに当てはまる」「こうだったらかこっちじゃないか」と考えて

いけるような、「構造図Ⅱ型」を意識世界に作っておく……その後人生の中で何をそこに放り込むのかは、その都度それぞれの自由なわけです。

しかし、その枠組みがあるということを含めて中に盛られていくイメージの世界やイメージ運動に何らかの偏りがみられる、それが主宰者である上原先生が明らかにしようとしてきた「心意伝承」ということにつながっていくし、個々人が目に見えないけれども何か大きな水脈のようなものにつながって生きる姿勢に通じていくと考えます。

最後に「夢と現実の世界」について学生自身に対してということの上原先生が語った内容を紹介しておきます。(児童の言語研究 第6回 昭和59年5月24日より)

我々も考えてみましょうね。「現実と夢とは違うんだ」とよく言いますが、本当ですか？ 皆さんもある時期までは現実と夢とを区別してきたでしょうけれども、もうボツボツまた子供に帰って現実と夢とのつながりを考えてみる段階へお入りになった方がよろしいかと私は思いますね。そちらの方がより高度な生き方ができると私は思いますよ。「自分の考えていることは夢なんだ。現実にはなかなか相容れてくれないんだ。現実

しいんだ」なんていうのはある段階でしかないんじゃないでしょうか。

実際に我々は現実生きていますよ。「実感」においてだけ生きていますよ。私たちは世間のつながりや人間関係を持って生きていくと思う、そしてそれが現実だと思ってる。しかしそこに自分を見出すと言うのは大変苦労なことですよ。そこには自分はいないんですよ。極めてパターン化された生活様式があつてそこに自分は乗っかっているだけなんですから。

自分を本当に住まわせているのは夢の世界ではないですか？ いつまでたっても。私を一番心休まるように住まわせてくれているのは現実と離れたところにそれぞれの人がいらっしやるのではないですか？

だいたい我々がこの世をおさらばする時にね、「俺は長い夢をみていた」と言っておさらばするんじゃないですか。豊臣秀吉だつてそうでしょ。「難波の夢は夢のまた夢」って言つて「サヨナラ」つてしたんじゃないですか。そうでしょ。「ああ、今初めて夢から覚めた」それから死んであの世へ、つて言うんですよ。みんな同じ想いをしてるんじゃないですか？ そうするとこの世に生きていますと夢をみるために生きていますよ。これも自然科学に人間が破壊されているか

らなんです。そういうことが思えなくなつてしまつたんですよ。自然科学に破壊されていなくなつたら我々はもつともつと楽しかつたはずですよ。夢をみて過ごせたからですよ。どうして夢をみて過ごすことが悪いんですか！ それしかみられないんですよ、人間は。もう皆さんは次の夢時代に入つて欲しい。特に教育学をやる人たちですよ、あなたがたは。私は教育学をやる人は絶対ロマンチストでなければいけない、つていうのが私の信念ですから。

ロマンチズムつていうのは滅びるんです。でもこうも言えるんですよ。「破れるからロマンチズムなんだ」つて。「僕がこの世に描こうとした教育における夢を俺は何も果たすことはできなかった」つて。「私は悲しくまたこの世を去つていく」それでいいじゃないですか！ それが言えれば素晴らしいことですよ。それが私は教育科の学生でなければなりません。と思つて。

小原國芳が「夢夢夢……」つて書いているのは何の夢か、何の意味だつたのか。もう少し高度な意味で捉えてほしい。人間は夢を見なければ生きられない動物なんです。夢を見ていこうとするものですよ、本来。それが夢を見ていますから。

(元小学校教諭 現家庭教師)